

令和元年度・令和2年度・令和3年度  
文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」  
事業報告書

大学院文学研究科  
日本語教員養成コース新規開発事業

令和4年4月28日

学校法人 日本大学

## 目 次

1. 事業の概要	3
1.1 事業の名称	3
1.2 事業の目的	3
1.3 事業の実施期間	3
1.4 事業内容と実施体制	3
1.5 事業評価の方法	5
2. 教育課程の検討：大学院文学研究科における日本語教員養成コース教育課程の新設とその運営基盤の形成	6
2.1 大学院日本語教育コースのカリキュラム	6
2.2 科目の概要	8
2.3 大学院入試	9
2.4 大学院日本語教育コースの履修登録者数	9
2.5 大学院入学者増加のための学部教育での取り組み	10
2.6 広報活動	10
2.6.1 国内向け広報	11
2.6.2 海外向け広報	13
3. 教材の検討・開発：大学院日本語教育コース教材の検討	14
3.1 教材動画の作成	14
3.2 オンデマンドシラバス	17
4. 養成・研修の実施：日本語教育実習への取り組み	17
4.1 「日本語教育実習1（国内）」の取り組み	17
4.2 「日本語教育実習2（海外）」の取り組み	18
5. その他関連する取り組み	18
5.1 グローバル教育研究センター，留学生サポート室	18
5.2 留学生サポーター制度	19
5.3 Blackboard「留学生サポート室」	21
6. 事業への評価	21
6.1 評価委員会	21
6.2 受講者に対するアンケート	22
7. 総括と課題	28
7.1 総括	28
7.2 課題	28

## 1. 事業の概要

### 1.1 事業の名称

大学院文学研究科日本語教員養成コース新規開発事業

### 1.2 事業の目的

日本国内では、海外から日本に来て働く人が増える中、企業では多様な人材育成の鍵として、日本語教育の知識とスキルが重視されている。また、近年、初等中等教育において日本語が十分でない児童生徒が増えており、そのような児童生徒に対する日本語教育も地域社会における重要な課題となっている。一方、海外においては、日本入国以前の日本語教育を担当できる人材の育成が急務となっているが、海外の日本語教育では修士以上の学位が必要とされることが多い。

これらの現状をふまえ、教員養成を目的として設立された歴史を有し、現在でも教員養成に力を入れている大学院文学研究科に、日本語教育人材を養成するコース（以下「大学院日本語教育コース」）を整備することが本事業の目的である。

### 1.3 事業の実施期間

大学院日本語教育コースは、日本語教育学の基礎的な知識とスキルを学ぶ「大学院基礎コース」と、日本語教育学について専門的に学ぶ「大学院応用コース」からなる（詳細は2.1で記述）。

本事業の対象である「大学院日本語教育コース（応用コース）」は、大学院文学研究科国文学専攻に設置されたコースである。平成30年度から開設準備に入り、令和2年度にコースが開設された。本事業は令和元年度から令和3年度にかけて実施され、大学院日本語教育コースのカリキュラムと教材の開発を行った。

令和元年度（コース開設準備）

令和元年8月下旬～令和2年3月20日（7か月）

令和2年度（コース開設）

令和2年5月初旬～令和3年3月19日（約10か月）

令和3年度（コース完成）

令和3年5月初旬～令和4年3月18日（約10か月） 合計：27か月

### 1.4 事業内容と実施体制

本事業では、次の4つを事業の柱とした。

#### (1) 教育課程の検討（2.で記述）

大学院文学研究科における日本語教員養成コース教育課程の新設とその運営基盤の形成

#### (2) 教材の検討・開発（3.で記述）

大学院日本語教育コース教材の検討／日本大学文理学部オンデマンドシラバス

- ならびに教材用動画の作成
- (3) 養成・研修の実施（4. で記述）
  - 日本語教育実習の運営
- (4) その他関連する取り組み（5. で記述）
  - A グローバル教育研究センター（Global Research Education Center: GREC）の設置
  - B 留学生支援のためのサポート体制の確立とサポーター育成

事業の実施にあたっては、それぞれの柱について以下の会議体を組織した。

- (1) 大学院文学研究科における日本語教員養成コース教育課程の新設とその運営基盤の形成
- (4) A グローバル教育研究センター（Global Research Education Center: GREC）の設置

- 委員長 田中ゆかり（日本大学文理学部教授）
- 副委員長 坂本恵（日本大学文理学部教授）
- 委員 井上優（日本大学文理学部教授）（令和2年度より）
- 委員 金愛蘭（日本大学文理学部准教授）
- 委員 野田尚史（令和元年度・令和2年度は国立国語研究所教授・日本大学文理学部客員教授，令和3年度より日本大学文理学部教授）

- (2) 大学院日本語教育コース教材の検討／日本大学文理学部オンデマンドシラバスならびに教材用動画の作成

- 委員長 坂本恵
- 副委員長 金愛蘭
- 委員 井上優
- 委員 田中ゆかり
- 委員 野田尚史

- (3) 養成・研修の実施：日本語教育実習の運営

- 委員長 坂本恵
- 副委員長 金愛蘭
- 委員 井上優
- 委員 田中ゆかり
- 委員 野田尚史
- 委員 三原裕子（日本大学文理学部非常勤講師）
- 委員 吉川香緒子（日本大学文理学部非常勤講師）
- 委員 王成（中国・清華大学教授）

- 委員 施信余（台湾・淡江大学副教授）
- 委員 呉佩珍（台湾・国立政治大学教授）（令和元年度）
- 委員 許夏珮（台湾・東呉大学副教授）（令和2年度）
- 委員 羅濟立（台湾・東呉大学教授）（令和3年度）

(4) B 留学生支援のためのサポート体制の確立とサポーター育成

- 委員長 坂本恵
- 副委員長 金愛蘭
- 委員 井上優
- 委員 田中ゆかり
- 委員 李婷（日本大学文理学部助教）
- 委員 野田尚史
- 委員 三原裕子
- 委員 吉川香緒子

事務体制は文理学部教務課を中心とし、事業経費等に関しては、同学部庶務課（賃金・謝金・旅費）、管財課（消耗品・印刷費）、会計課（経費支払い）がチェック・執行を行う体制とした。

1.5 事業評価の方法

事業評価のための評価委員会を設置し、計画段階から教育プログラムに関する意見や助言を聴取した。事業完了時には、事業全体に対する評価を依頼した。

委員には、学内の他機関の日本語教育関係の教員、ならびに、日本語教育実習を実施する予定の海外協定校の日本語教育担当者も加えた。委員会の構成員は以下の通りである。

- 委員長 坂本恵（日本大学文理学部教授）
- 副委員長 田中ゆかり（日本大学文理学部教授）
- 委員 野田尚史（令和元年度・令和2年度は国立国語研究所教授・日本大学文理学部客員教授。令和3年度より日本大学文理学部教授）
- 委員 島田めぐみ（日本大学総合社会情報研究科教授）
- 委員 迫田久美子（広島大学特任教授）
- 委員 友沢昭江（桃山学院大学教授）
- 委員 王成（中国・清華大学教授）
- 委員 施信余（台湾・淡江大学副教授）
- 委員 呉佩珍（台湾・国立政治大学教授）（令和元年度）
- 委員 許夏珮（台湾・東呉大学副教授）（令和2年度）
- 委員 羅濟立（台湾・東呉大学教授）（令和3年度）

コース修了生に対しても、アンケート調査等により、コースに対する感想や意見を聴取した。

## 2. 教育課程の検討：大学院文学研究科における日本語教員養成コース教育課程の新設とその運営基盤の形成

### 2.1 大学院日本語教育コースのカリキュラム

大学院日本語教育コースは、日本語教育学の基礎的な知識とスキルを学ぶ「基礎コース」と、日本語教育学について専門的に学ぶ「応用コース」からなる。

「大学院日本語教育コース（基礎コース）」は、文理学部キャンパスにある研究科（文学研究科・総合基礎科学研究科・理工学研究科（地理学専攻））の全専攻の学生が履修できるコースであり、「日本語教育学特論 1・2・3」および「日本語教育実習」の 4 科目 9 単位を修得することを通じて、自身の専門を深めながら、日本語教育学の基礎的な知識とスキルを学ぶ。日本語教育実習は「日本語教育実習 1（国内）」と「日本語教育実習 2（海外）」のいずれかを選択する。コース修了後、文学研究科より「大学院基礎コース修了証明書」が発行される。

本事業の対象である「大学院日本語教育コース（応用コース）」は、文学研究科国文学専攻に設置されたコースであり、基礎コースの科目 4 科目 9 単位に加え、応用コースの科目 9 科目 17 単位（実質 18 単位）以上、合計 13 科目 26 単位以上を修得することを通じて、日本語教育学・日本語学の研究能力を磨き、実践的な問題解決能力を身に付ける。カリキュラムは、文化審議会国語分科会「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」（平成 31 年）の「日本語教師【養成】における教育内容」をカバーするように設計されている。専任教員だけでは十分にカバーできない分野については、学外の研究者に集中講義を依頼する等の形で対応している。コース修了後、「基礎コース」「応用コース」とともに、文学研究科より「大学院応用コース修了証明書」が発行される。

表1 「大学院日本語教育コース（応用コース）」カリキュラム

科目名	単位数	選択 必修	配当 学年	履修条件	大学院日本語コース (基礎コース)と共通
日本語教育学特論1 (日本語教育学概論)	2	必修	1年	「日本語教育学特論1」 「日本語教育学特論2」 修得済み	
日本語教育学特論2 (日本語教育文法)	2				
日本語教育学特論3 (教材・教具論)	2				
日本語教育実習1 (国内)	3	選択必修	2年	「日本語教育学特論1」 「日本語教育学特論2」 「日本語教育学特論3」 3科目修得済み	
日本語教育実習2 (海外)	3				
日本語教育学特殊講義1	2	選 択 (17単位(実 質18単位) 以上を履修)			
日本語教育学特殊講義2	2				
日本語教育学特殊講義3	2				
日本語教育学特殊講義4	2				
日本語教育学特殊講義5	2				
日本語教育学特殊講義6	2				
日本語教育学特殊講義7	2				
日本語教育学特殊講義8	2				
日本語教育学専門演習1	2				
日本語教育学専門演習2	2				
日本語教育学専門演習3	2				
日本語教育学専門演習4	2				
日本語教育学専門演習5	2				
日本語教育学専門演習6	2				
日本語教育学専門演習7	2				
日本語教育学専門演習8	2				
日本語教育学総合研究1	2				
日本語教育学総合研究2	2				
日本語教育学総合研究3	2				
日本語教育学総合研究4	2				
日本語教育学総合研究5	2				
日本語教育学総合研究6	2				
日本語学特殊講義1	2				
日本語学特殊講義2	2				
日本語学特殊講義3	2				
日本語学専門演習1	2				
日本語学専門演習2	2				
日本語学専門演習3	2				
日本語学基礎研究1	2				
日本語学基礎研究2	2				
日本語学基礎研究3	2				

(次ページに続く)

\*国文学専攻及び史学専攻の「日本事情」相当科目を履修した場合、応用コースの18単位のうち2単位のうちに充当できる。

「日本事情」相当科目

史学：日本史特殊講義 1～8，日本史特殊研究 1～8，日本史 1～8

国文学：古典文学特殊講義 1～6，近現代文学特殊講義 1～4

古典文学専門演習 1～6，近現代文学専門演習 1～4

総合研究 1～6

古典文学基礎研究 1～6，近現代文学基礎研究 1～4

## 2.2 科目の概要

大学院日本語教育コースの基幹をなす必修科目・選択必修科目（4科目）の内容は次の通りである。（「日本語教育実習2（海外）」はCOVID-19の影響により令和3年度には実施できなかった。）

（参考）文理学部・文学研究科シラバス <http://syllabus.chs.nihon-u.ac.jp/>



### 【日本語教育学特論1】（令和2年度・3年度担当：坂本恵）

日本語教育の概要，日本語教授法について学ぶ。日本語学の知識を得る。

- ・日本語教育とはどのようなものであるかを学ぶ。
- ・日本語教授法の概要について学ぶ。
- ・日本語学，特に音声，表記，敬語について学ぶ。

（参考）令和4年度シラバス（担当：坂本恵）

<http://syllabus.chs.nihon-u.ac.jp/op/syllabus77777.html>

### 【日本語教育学特論2】（令和2年度・3年度担当：井上優）

文法に関する基本概念について確認しながら，現代日本語の文法について概観するとともに，どのような文法説明が日本語学習者にとって有益かを検討する。

- ・現代日本語文法の基本的な部分について，自分のことばで説明できるようになる。
- ・日本語学習者の視点から「よりよい文法説明」について考えることができるようになる。

（参考）令和4年度シラバス（担当：野田尚史）

<http://syllabus.chs.nihon-u.ac.jp/op/syllabus77778.html>

### 【日本語教育学特論3】（令和2年度・3年度担当：金愛蘭）

教材・教具にかかわる概念を学び，教育実践との関係を理解する。

- ・教材・教具の役割と効果的な使用法について学ぶ。
- ・実際の日本語模擬授業を通して，よりよい授業実践のために必要な教材・教具とは何かについて理解する。



(参考) 令和4年度シラバス (担当: 金愛蘭)

<http://syllabus.chs.nihon-u.ac.jp/op/syllabus77779.html>

【日本語教育実習1 (国内)】 (令和3年度担当: 坂本恵・金愛蘭)

模擬授業, 教壇実習を通して初級日本語教育の力をつける。

- ・初級日本語授業の実際を学ぶ。
- ・初級日本語授業の分析力をつける。
- ・教壇実習を通じて初級日本語の教授力を身につける。

(参考) 令和4年度シラバス (担当: 金愛蘭・坂本恵)

<http://syllabus.chs.nihon-u.ac.jp/op/syllabus77780.html>

### 2.3 大学院入試

「大学院日本語教育コース (基礎コース)」は, 文学研究科・総合基礎科学研究科・理工学研究科 (地理学専攻) の全専攻の学生が履修可能であり, 履修希望者は各研究科・専攻の入試を受験して入学した後に, 基礎コースの履修登録を行う。

「大学院日本語教育コース (応用コース)」の履修をするためには, 文学研究科 (博士前期課程) の入学試験を通過する必要がある。出願に際しては, 国文学専攻日本語教育コースを志望する。文学研究科 (博士前期課程) の入試区分・日程・試験科目は以下の通りである。

表2 令和4年度大学院入試 (博士前期課程) の入試区分・日程・科目

入試区分	試験日	合格発表	試験科目
学内A (文理学部在籍者のみ対象)	令和3年 7月3日 (土)	令和3年 7月13日 (火)	筆記試験 (専門科目) 口述試験
第1期	令和3年 10月2日 (土)	令和3年 10月13日 (水)	筆記試験 (外国語) 筆記試験 (専門科目) 口述試験
社会人第1期	令和3年 10月2日 (土)	令和3年 10月13日 (水)	論文 (小論文) 口述試験
外国人留学生	令和3年 11月20日 (土)	令和3年 12月1日 (水)	筆記試験 (日本語) 筆記試験 (専門科目) 口述試験
第2期	令和4年 2月19日 (土)	令和4年 3月2日 (水)	筆記試験 (外国語) 筆記試験 (専門科目) 口述試験
社会人第2期	令和4年 2月19日 (土)	令和4年 3月2日 (水)	論文 (小論文) 口述試験

### 2.4 大学院日本語教育コースの履修登録者数

大学院日本語教育コースの学期ごとの履修者数は次の通りである。全研究科・専攻に開

かれたコースであるため、履修者には総合基礎科学研究科・理工学研究科（地理学専攻）の大学院生も含まれる。

表3 「大学院日本語教育コース」履修者数

年度	学期	大学院 基礎コース	大学院 応用コース	付 記
令和2年度	前期	6名 (M1)	0名	
	後期	6名 (M1)	0名	
令和3年度	前期	8名 (M1) 5名 (M2)	1名 (M1)	M2は日本語教育実習1(国内)
	後期	5名 (M1)	1名 (M1)	M2の5名は全員コース修了

## 2.5 大学院入学者増加のための学部教育での取り組み

大学院日本語教育コース（応用コース）の入学者を増やすために、学部に「学部日本語教育コース（基礎コース）」を開設した（令和3年度より科目開講）。学部日本語教育コースは、文理学部の人文系・社会系・理学系の全18学科の学生が履修でき、コース修了後、文理学部より「学部基礎コース修了証明書」が発行される。

学部日本語教育コース（基礎コース）のカリキュラムは以下の通りである。

表4 「学部日本語教育コース（基礎コース）」カリキュラム

科目名	配当学年	単位数	履修要件	必修・選択
日本語教育学入門	2年次 以上	2	「日本語教育学入門」 修得済みであること	必修
日本語教育の ための文法		2		
教材・教具論		2		
日本語教育実習	3年次 以上	3	「日本語教育学入門」 「日本語教育のための文法」 「教材・教具論」 3科目修得済みであること	

このほかに、日本語教育に対する関心を高めるために、令和3年度には学部の総合教育科目として「国際日本学入門」「総合研究1～8「海外で働く」」の2科目を新たに開講した。また、テンプル大学日本校（世田谷区）と連携し、主に英語を母語とする日本語初級学習者と「やさしい日本語」による交流イベントを開催した。

## 2.6 広報活動

大学院日本語教育コースの入学者を増やすために、活発な広報活動を行った。

## 2.6.1 国内向け広報

### (1) 日本大学文理学部ホームページ

日本大学文理学部ホームページに「日本語教育コース」のページを開設し、コースの紹介動画を掲載した。

- ・日本語教育部門 日本語教育コースについて
- ・文理キャンパスで学ぼう「日本語教育コース」

<https://chs.nihon-u.ac.jp/international/grec/japanese-education/> に掲載。



日本語教育コース紹介（山中ゆかり先生）

### 【日本大学文理学部ホームページ 日本語教育コース紹介動画】

### (2) オープン・キャンパス

令和元年度のオープン・キャンパスでは、「日本語教育コース」のブースを設置し、訪問者に対して「日本語教育コース」の説明を行った。

令和2年度・3年度は、COVID-19 感染拡大抑制の観点から、オープン・キャンパスがオンライン形式となったため、文理学部ホームページの特設ページに、日本語教育コースの紹介動画を掲載し、オンラインで質問・相談等を受け付けた。

### (3) 「日本語教育コース」リーフレット、日本大学大学院文学研究科パンフレット

日本語教育コースについて紹介するリーフレットを、日本語版、英語版、中国語（簡体字）版、中国語（繁体字）版、韓国語版の5種類作成した。

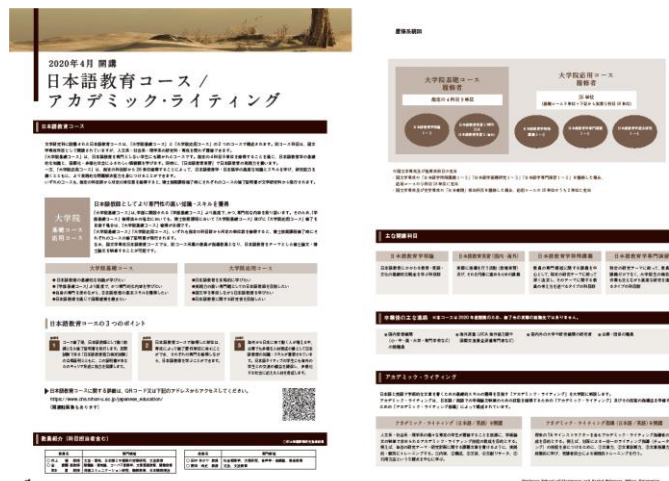
<https://chs.nihon-u.ac.jp/international/grec/japanese-education/> に掲載。



### 【「日本語教育コース」リーフレット（日本語版：一部）】

また、「日本大学大学院文学研究科パンフレット」の2ページを割いて、日本語教育コースについて紹介した。

<https://chs.nihon-u.ac.jp/gs-iss/> に掲載。



【日本大学大学院文学研究科パンフレット（日本語教育コース紹介部分）】

#### (4) 日本語学校および大学院入学希望者への広報

(令和元年度)

教職員が以下の14校を訪問し、日本語教育コースの説明を行った。

赤門会日本語学校、公益財団法人アジア学生文化協会、淑徳日本語学校、新宿日本語学校、千駄ヶ谷日本語学校、東京国際大学附属日本語学校、東京国際日本語学院、東京日本語学校（長沼スクール）、日本学生支援機構東京日本語教育センター、メロス言語学院、山野日本語学校、行知学園、名校志向塾、Knowing Education

(令和2年度)

COVID-19 感染拡大抑制の観点から、以下の24校に対して、オンライン（Zoom）で日本語教育コースの説明を行った。

ARC 東京日本語学校、ISI 日本語学校、エリート日本語学校、国書日本語学校、サム教育学院、JCLI 日本語学校、システム桐葉外語、申豊国際学院、進和外語アカデミー、ダイナミックビジネスカレッジ、玉川国際学院、東京ギャラクシー日本語学校、東京中央日本語学院、東京早稲田外国語学校、ヒューマンアカデミー日本語学校、フジ国際語学院、MANABI 外語学院東京校、ミッドリーム日本語学校、ミツミネキャリアアカデミー、友ランゲージアカデミー、ユニタス日本語学校東京校、YMCA 東京日本語学校、早稲田文化館日本語科

(令和3年度)

COVID-19 感染拡大抑制の観点から、教育機関に対する広報支援事業を展開している企業のサービスを利用し、全国の日本語学校約600校に「日本語教育コース」および文理学部・大学院等のパンフレットを送付し、56名(52校)が参加した「オンライン大学説明会」(令和3年7月9日(金))において日本語教育コースの説明を行った。

また、同じ企業が企画した「現役日本語教師と日本語教師を目指す人のための大学院準備講座」(令和3年7月2日(金)、令和3年11月6日(土))を利用して、大学院で日本語教育を学びたいと考えている学生や社会人に日本語教育コースの説明を行った。

#### (5) 日本語教育関連の媒体への広告

留学生や日本語教師を目指す人がよく見る雑誌やウェブサイトに「日本語教育コース」の広告を掲載した。

- ・『日本語を教えよう』(イカロス出版)
- ・『日本語学』(明治書院)
- ・「Foreign Student Times」(ジャパントイムズ)
- ・ウェブサイト「日本語教師になりたい人のための学校ガイド」(アルク)
- ・ウェブサイト「Study in Japan」(ジャパントイムズ)

### 2.6.2 海外向け広報

#### (1) 中国

「日本語教育コース」開設のことを広く知ってもらうため、日本語専攻を有する以下の機関を教職員が訪問し、説明会等を実施した(令和元年4月)。

- ・北京：北方工業大学(説明会)、北京林業大学(表敬訪問)、清華大学(講演会)
- ・上海：上海建橋学院(説明会)、上海海洋大学(説明会)、上海立信会計金融学院(表敬訪問)
- ・南京：南京農業大学(説明会)、南京師範大学(座談会)



【上海での「日本語教育コース」広報活動の様子】

#### (2) 台湾

以下の機関を訪問し、日本語教育コースの広報、日本語教育実習の受け入れ等の協定に

関する打ち合わせ、教育研究協定等の可能性に関する打ち合わせなどを行った（令和元年8月）。

- ・台湾師範大学，東呉大学，淡江大学，台湾大学，国立政治大学
- ・公益財団法人日本台湾交流協会，台湾日本大学校友会



【台湾での「日本語教育コース」広報活動の様子】

### (3) 日中教育交流会（大阪）

令和元年11月に大阪で開催された「第6回日中教育交流会」において「日本語教育コース」のブースを設置した。交流会には、中国の大学（48大学126名），専門学校（11校23名），高等学校（12校22名）が参加した。ブースでは、13大学を含む26機関の関係者と面談する機会を得た。



【日中教育交流会 「日本語教育コース」説明ブース】

## 3. 教材の検討・開発：大学院日本語教育コース教材の検討

### 3.1 教材動画の作成

大学院日本語教育コースの基幹をなす「日本語教授法」「日本語教育文法」「日本語教材研究」「日本語教育実習」の授業にふさわしい教材開発について検討し、以下の動画を作成した。

公開動画の掲載先

<https://chs.nihon-u.ac.jp/international/grec/japanese-education/>



## 【講義動画】

講義動画は以下のものを作成した。コース担当教員の研究領域をふまえつつ、日本語教育に関わるさまざまな領域についてバランスよく取り上げることがを心がけた。

### ①「日本語教育」とは？（野田尚史）（10分）

内容：日本語教育について知らない人に日本語教育について知ってもらうための動画。日本語を母語としない学習者に対する「日本語教育」が日本語を母語とする児童生徒に対する「国語教育」と異なることを述べるとともに、日本語教育において「日本語を母語とする教師」と「日本語を母語としない教師」がそれぞれ異なる役割を担っていることを述べている。

### ②日本語授業の様子・解説付（金愛蘭）（7分）

内容：日本語の授業の実際について理解してもらうための動画。授業動画「日本語授業の様子（初級・直接法）」（坂本恵）からいくつかの場面を抜き出し、それぞれの場面について解説を加えている。

### ③日本語学習者の日本語（野田尚史）（15分）

内容：「日本語学習者の日本語」を通じて日本語の仕組みについて考えてもらうための動画。日本語を母語としない人の日本語の誤用や誤読の例を紹介し、その背景にもっともな理由があることを述べるとともに、その理由について考えることが日本語の仕組みについて考えることにつながることを述べている。

### ④対照研究と異文化理解—日本と中国を例に—（井上優）（15分）

内容：多文化共生に必要な「異文化理解」のエッセンスについて理解してもらうための動画。言語教育と密接な関係にある対照言語学（2つの言語の比較対照を通じて各言語の特質を明らかにする研究）のエッセンスについて述べるとともに、対照言語学の見方・考え方が異文化理解において本質的に重要であることを、日本語と中国語の言語行動を例として述べている。

### ⑤文法とコミュニケーション（井上優）（10分）

内容：文法とコミュニケーションの関係を考えることを通じて、日本語教育において教えるべき事柄について考えてもらうための動画。「ている」と「た」の使い分け、「いいです」の意味の決まり方の2つを例に、文法が「形式の使い分け」「意味の決まり方」からなることを述べ、文法がコミュニケーションにおいて本質的に重要な役割を果たしていることを述べている。

⑥クイズ形式で学ぶ 日本語教育とは？（金愛蘭）（6分）

内容：日本語教育について知らない人に日本語教育について知ってもらうための動画。日本語の発音・文法・語彙・コミュニケーションに関する日本語学習者の疑問や誤用の例をあげ、それについて解説することを通じて、「日本語を教える」ことが、日本語の仕組みについて考えること、そして、ことばの裏にある日本の「社会」「文化」について考えることから始まることを述べている。

以下の動画は令和4年3月まで公開した（現在非公開）。コース科目の授業の材料として使用する。

⑦「日本語教育」とは？（坂本恵）（20分）

内容：日本語教育について知らない人に日本語教育について知ってもらうための動画。多様な背景を持った日本語を母語としない人々が身近な存在になっていることを紹介しながら、日本語教育が「日本語を母語としない人たちが日本語を使えるようにするための手助けをする」ものであること、日本語教師にとって「相手の日本語のレベルに合わせて日本語で話ができる」ことが最も重要であること、日本語教師ではない人にも日本語教育に関する知識が必要なことなどを述べている。

⑧日本語の敬語の考え方（坂本恵）（20分）

内容：日本語教育において重要な位置を占める「敬語」について理解を深めるための動画。いわゆる「敬語」をより一般的な「相手や場面によってことばを使い分ける」という「待遇コミュニケーション」の観点から捉え直したうえで、日本語の待遇コミュニケーションについて、日本語母語話者と日本語学習者との感覚のずれを含め、具体例をあげて説明している。

**【授業】**

以下の動画は、コース科目の授業の材料として使用するために作成した（非公開）。学習者の母語を使わずに直接法で日本語を教える様子を収録している。対面形式だけでなく、オンライン形式の日本語の授業の様子も収録している。

①日本語授業の様子（初級・直接法）（坂本恵）（30分）

②初級日本語の授業風景（初級）（坂本恵）（30分）

③初級日本語の授業風景（坂本恵）（15分）（①を編集したもの）

④日本語授業の様子（聴解・中級）（坂本恵）（44分）

⑤初級日本語の授業風景（日本語の教え方）（初級）（金愛蘭）（4分）

⑥日本語授業の様子（初級・直接法・オンライン授業）（吉川香緒子）（約40分）



この他、令和3年度に実施した大学院日本語教育コース「日本語教育実習1（国内）」における受講生の模擬授業の様子を記録した動画も作成した。

⑦日本語教育コース受講生の模擬授業の様子（1名15分程度）

## 【イベント】

イベントの記録として以下の動画を作成した（非公開）。

①ワークショップ「大学院における日本語教師養成の現状と課題」

（講師：保坂敏子・迫田久美子・友沢昭江）

内容：令和2年3月24日（火）にオンライン形式で実施したワークショップの講演記録。

②「やさしい日本語」と英語を使った初級日本語学習者との交流（金愛蘭）

内容：令和3年度にテンプル大学日本校の協力を得て実施した「やさしい日本語による日本語学習者との交流」イベントの様子を記録した動画。

## 3.2 オンデマンドシラバス

教育の可視化ならびに学生サービスの一環として日本大学文理学部で行っている、科目内容の紹介内容動画「オンデマンドシラバス」を大学院日本語教育コースの科目について作成することを計画していた。当初の計画では、授業の様子をビデオ撮影したものに解説をつける形でオンデマンドシラバスを作成する予定であったが、COVID-19感染症拡大抑制のために授業そのものが遠隔（オンライン）で実施されたため、作成することができなかった。

## 4. 養成・研修の実施：日本語教育実習への取り組み

大学院日本語教育コースの必修科目である「日本語教育実習」には、「日本語教育実習1（国内）」と「日本語教育実習2（海外）」がある。いずれも、オリエンテーション、授業見学（授業動画の視聴）、教材研究、教案作成、模擬授業、教壇実習などからなる。

### 4.1 「日本語教育実習1（国内）」の取り組み

「日本語教育実習1（国内）」の実施に向けて、授業で使用するコンピュータ、ビデオカメラ、教材教具等の必要な物品をそろえた。また、①実習時の学習者役を担当する「実習協力者」、②実習生が負担する実習費、ならびに、③実習の指導補助を担当する「実習コーディネーター」に関する制度や手続きを整備した。

令和3年度の「日本語教育実習1（国内）」の履修登録者は6名であった（ただし、1名は履修登録のみで実習には参加しなかった）。実習生の科目履修の関係で、座学部分と実習部分をともに前学期の授業終了直後の1週目と2週目に集中講義形式で実施した。

COVID-19 の第 5 波の感染拡大の時期と重なったため、対面授業を基本としつつ、遠隔形式も一部取り入れた（実習協力者のうち 2 名が遠隔で参加。最終日は実習生も一部遠隔で参加）。

第 1 週の座学部分では、講義、授業動画の視聴のほか、実習コーディネーターが教案作成について個別指導を行い、それをもとに模擬授業を 1 名につき 2 回ずつ行った。

第 2 週の教壇実習では、実習協力者の前でそれぞれの実習生が 45 分の授業を 2 回ずつ行った。授業の後、反省会、ならびに指導教員による実習生を学習者役とするデモ授業を行った。



#### 【「日本語教育実習 1（国内）」の様子（教壇実習）】

#### 4.2 「日本語教育実習 2（海外）」の取り組み

「日本語教育実習 2（海外）」については、東呉大学（台湾・台北市）と「日本大学大学院文学研究科と東呉大学外国語文学院（台湾）との学術交流に関する覚書」を締結した。

東呉大学は大学院博士後期課程に日本語学専攻を有する台湾で唯一の大学であり、日本語・日本文化を学ぶ学生も多い。日本語教員養成大学として教員養成プログラムも充実しており、日本の大学の日本語教育実習も複数受け入れている。

令和元年度に本学教職員が東呉大学を訪問し、日本語文学科の主任・副主任と面談して、日本語教育コースの海外教育実習の受け入れを打診した。その後、協議を進め、令和 3 年度からの教育実習受入に関する覚書を正式に締結した。ただし、COVID-19 の影響により、東呉大学における教育実習の実施は令和 4 年度以降になる見込みである。

東呉大学のほか、清華大学（中国・北京市）でも教育実習を行う計画があり、現在、必要な協定を取り交わすための準備を進めている。

### 5. その他関連する取り組み

#### 5.1 グローバル教育研究センター、留学生サポート室

日本大学文理学部・大学院に在籍する外国人留学生に係る学内の事務組織を一本化し、留学生に対するワンストップサービスを行う部署として、令和 2 年 4 月に文理学部 3 号館 2 階に「グローバル教育研究センター」（Global Research Education Center: GREC）を設置した。

また、グローバル教育研究センター内に「留学生サポート室」を設置し、センター配属の事務職員を配置して、留学生からの問い合わせや相談等への対応、留学生の成績不振者に対する対応などを行っている。



【「留学生サポート室」周知のためのポスター】

## 5.2 留学生サポーター制度

日本大学文理学部は人文系・社会系・理学系の 18 の学科を擁し、留学生（特に新入学の留学生）が直面する学業面の問題も学科ごとに異なることが多い。そのことをふまえ、日本人学生および留学生の上級生を「留学生サポーター」として育成・雇用し、留学生のサポートを行う制度を令和 2 年 4 月に立ち上げた。

令和 2 年度・令和 3 年度の留学生サポーターの人数は以下の通りである。

令和 2 年度：22 名（学部生 16 名，大学院生 6 名）

令和 3 年度：23 名（学部生 17 名，大学院生 6 名）

留学生サポーターに対しては、適切なサポートがおこなえるよう、各種の講習会やミーティングを随時実施している。

留学生サポート制度は、留学生に対するサポートを充実させるだけでなく、留学生との交流、イベントの企画運営、サポーター同志の交流等によるサポーター自身の成長にもつながっている。

留学生サポーターには、所属学科の留学生支援を主な業務とする「学科サポーター」と、グローバル教育研究センター内に設置された「留学生サポートデスク」で留学生の各種相談に応じる「デスクサポーター」があり、以下のような活動を行っている。

### ①新入学の留学生に対する履修相談

年度初めに開かれる「留学生新入生ガイダンス」に出席し、学科別に留学生新入生に対して履修に関するアドバイスをを行う。

②「留学生サポートデスク」での相談対応

留学生サポートデスクでは、令和2年度は23件、令和3年度は58件の相談を受け付けた。相談の内容は、履修や授業に関する事、学校生活に関する事、進路に関する事など多岐に渡っている。



【「留学生サポートデスク」案内】

③留学生交流イベントの企画・広報・運営

留学生サポーターの発案・企画・運営で、以下のイベントを実施。オンラインによるイベントであるが、留学生同志や留学生と日本人学生とのコミュニケーションの向上と相互理解を促進した。

表5 令和2年度・3年度 留学生交流イベント（オンライン）

オンラインカフェ	10回	テーマを決めたフリートーク
オンライン交流会	7回	留学生同志や留学生の日本人学生の交流
企画イベント	5回	「大学生活を充実させるためには」 「しくじり大学生 私みたいになるな！」 「大学院ってどんどころ？大学院徹底解剖！」 「サークル&奨学金」 「あなたの知らない就活情報がここに！ハタラコウ」

④ライティング・サポート、初級日本語学習者の日本語学習サポート

アカデミック・ライティングの講習を受けたサポーターが、課題やレポートに関するライティング・サポートを行っている（令和2年度・3年度はオンラインで合計32件）。

また、日本語初級レベルの留学生の学習サポートを、担当教員と連携をとりながら実施している。サポーターにとっても貴重な経験となっている。

### 5.3 Blackboard「留学生サポート室」

留学生サポーター制度は令和2年4月にスタートしたが、COVID-19の影響により、対面による個別サポートができなくなった。そこで、文理学部で使用している教育支援システム Blackboard に「留学生サポート室」を開設し、留学生サポーターがオンラインで留学生からの相談に応じられるようにした。Blackboard「留学生サポート室」は、留学生に対する事務連絡や情報提供のためのツールとしても利用されている。

Blackboard「留学生サポート室」の「掲示板」には、「何でも相談コーナー」、各学科の掲示板、「留学生必見！お役立ち情報」ほかがあり、留学生が相談内容を投稿すると留学生サポーターが回答してくれるしくみになっている。令和2年度・3年度の投稿件数は以下の通りである。

表6 令和2年度・3年度 Blackboard「留学生サポート室」への投稿件数

何でも相談コーナー	学科掲示板	留学生必見！お役立ち情報			
		学業	生活	就活	進学
279	132	43	115	19	17

## 6. 事業への評価

### 6.1 評価委員会

1.5に記したメンバーによる評価委員会は次の2回開催した。

令和2年度評価委員会 令和3年2月18日（木） オンライン

令和3年度評価委員会 令和4年2月14日（月） オンライン

令和2年度評価委員会では、以下のような評価と意見があった。

(評価)

- ・授業設計が魅力的である。
- ・留学生サポートセンターやアカデミック・ライティング等の科目の設置は必要な試みであり、評価できる。
- ・基礎コースの存在とその意義は重要で、初年度にも関わらず6名の受講者があることは成功と言える。
- ・社会人やすでに別の修士号を持つ人に対してアピールするコースである。

(意見)

#### ①入試

- ・海外からの受験者の便を図るために、出願から受験までオンラインで完結するような入試の導入を積極的に検討すべきである。
- ・応用コース希望者で残念ながら合格に至らなかった志願者を救済する方策や、より質の高い学生を集める方策を検討してほしい。

## ②案内・広報の充実

- ・入試情報などは、サイトなどでわかりやすい形で案内することが求められる。
- ・日本人学生の履修者が少ない印象を受ける。魅力的なコースなので、積極的にアピールし、認知度を高めることが必要である。

## ③授業・カリキュラムの検討と展開

- ・LMS を活用したオンライン授業や、オンライン授業で活用できるコンテンツ開発の充実を図ってほしい（ICT の活用）。
- ・オンライン日本語教育実習も検討してはどうか。
- ・日本語教育実習の実習協力者（生徒役）からも実習に対するフィードバックを求めるとよい。履修者にとっては学びが深まるとともに励みにもなる。
- ・博士課程の研究指導の充実を期待する。

## ④授業評価の実施と活用

- ・履修者に対して学期末に受講目的や満足度の調査を行い、コース運営に反映させることが期待される。

令和3年度評価委員会では、以下のような評価と意見があった。

### （評価）

- ・この日本語教育コースは大変魅力的なコースであり、所属学科・専攻の履修制限を設けず、文系から理系まで多様な学生が履修しているところがよい。
- ・コロナ禍という困難な中でかなり充実したコースとなり、先生方の熱意を感じた。

### （意見）

- ・今回の COVID-19 の経験で、オンラインを利用して海外から日本語教育を受講することができるという、新たな日本語教育の可能性が生まれたと思う。
- ・台湾では AI による翻訳技術が進んでおり、外国語教育はあまり重要視されなくなってきている。今後日本語を学ぶ学生も少なくなることも懸念される。こうした状況にどのように対処して行くのかが今後の課題だと思う。
- ・日本語教育実習については、対面とオンラインを利用したハイブリッド形式で実施し、海外にいる学生にも常に提供できるようになったらよいのではないかと。

## 6.2 受講者に対するアンケート

日本語教育コースに対する受講者の評価を知るべく、授業全体の振り返りやアンケート調査を実施した。

以下のコメントは、令和2年度に「日本語教育学特論1」「日本語教育学特論2」「日本語教育学特論3」を履修した後の振り返りのコメントの一部である（本人が書いたままの引用）。

- ・この授業は実践を重視し、「日本語教育学特論1」と「日本語教育学特論2」の理論勉強を中心とする授業より難しくなり、自身の問題点と不足点も発見しやすくなる。
- ・この授業はすごく実践を重視している授業であり、時間が短かったが、日本語教育学

勉強の基礎として、大変役に立ったと思っている。

- ・最後、模擬授業を通じて日本語教師をする難しさおよび授業以外の仕事量を感じました。未来教師になると、非常に良い経験でした。
- ・今学期の勉強を通して、どのようにうまく日本語を教えることができるかについてより深い認識ができた。いつか、本当に外国語の先生になって、学生たちに日本語を教えてあげたいと思っている。
- ・中国に留学した際、現地の友人に日本語の授業で分からない部分があったので教えてほしいと頼まれた。私は日本語母語話者であるから、当然説明できるはずだと思い友人の話を聞いたが、何ひとつとして納得してもらえない説明も話も出来なかった。日本語教育学特論の授業を受けて終えた今、私は出来なくて当然だったのだと強く感じる。文法的事項を知らなかったことはもちろんのこと、教え方も学ぶ側のことも何も知らなかったからである。しかし今なら多少は納得のいくものがあの日よりは出来ると思う。短い期間であったが、私はこう思える程度の学習をこの授業でさせてもらったのだと思っている。
- ・教える時は、言語に関する知識や文法事項を頭に入ればそれでできるのではないかと感じていたが、それ以上に表情や語気、話す速さやレベルに合わせた配慮が非常に重要だったことに、この日の授業や他の授業も通して気づかされた。他の外国語の授業で、自分がそうされたことが無いわけではない。あまりに当たり前で、自然で気づけなかったのだ。私がスムーズに勉強している裏で無数の工夫が凝らされていたのだと思う。私も教える機会があるならば、そうしたことのできる教師になりたい。
- ・生徒たちがどのような人たちで何を必要としているかを理解したうえで教科書を選び、自分の教え方や内容を選んで授業を成立させていくのは大変であると思う。また、なんとなく受けていた練習方法や問題にも、どのような文型をどのように正しく身に付けさせるかという明確な意図があることがわかった。身に付けてほしい文法を自然と引き出すための技術がつまっている。全体を通し、言語をさらに言語化して説明するのは非常に困難なことだと感じた。日本語を母語とするあまり感覚に頼り切っていた私にはひじょうに難しい部分である。
- ・日本語教師とは生徒への理解力や配慮、知識や工夫等が本当に沢山必要な職業だと思った。日本語が母語だから教えるのも難しくはないだろうとかつての私は思っていたがそれはとんでもない間違いで、むしろ母語だからこそ、難しい局面が多いと思う。学ぶ人の立場に立って物事を考えること、学んでもらうために教師として考えること、沢山の要素や能力が必要なのだと感じた。今までずっと教えてもらう立場に私はいたが、今後教える立場になった時は、それこそこの授業で勉強したことを思い出し、私が生徒だった時のことを思い出していきたい。そうして私がこれまで経験してきた、努力と工夫を詰め合わせた授業を、私からも誰かに届けられるように進歩していきたいと思う。

令和3年度には、「日本語教育実習1(国内)」を含む、大学院基礎コースのすべての科目を履修した大学院生5名を対象にアンケート調査を行った。以下にその結果を示す。

### 【1 入学前から存在を知っていたか】

5名全員が「知っていた」と回答した。

#### 1 入学前から存在を知っていたか

5件の回答



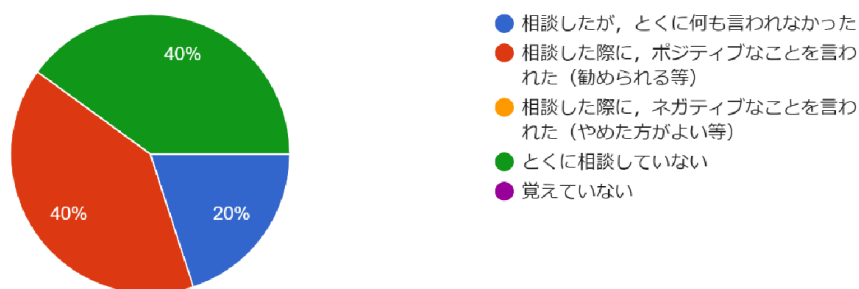
### 【2 指導教員に相談したか、反応はどうだったか】

3名が「相談した」と回答し、2名が「とくに相談していない」と回答した。

「相談した」のうち、2名は「相談した際に、ポジティブなことを言われた（勧められる等）」と回答し、1名は「相談したが、とくに何も言われなかった」と回答した。

#### 2 指導教員に相談したか、反応はどうだったか

5件の回答



### 【3 コースの授業科目について】

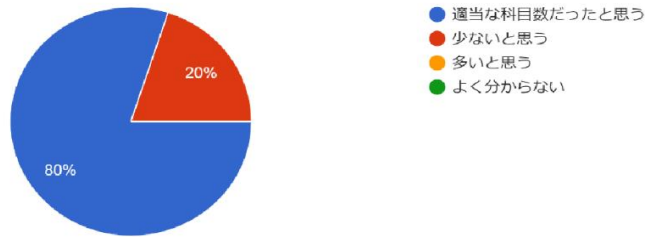
大学院基礎コースの科目（日本語教育学特論 1，日本語教育学特論 2，日本語教育学特論 3，日本語教育実習 1（国内））の内容に関する質問である。

「3-1 科目数は適当だったか」に対しては、4名が「適当な科目数だったと思う」と回答したが、1名は「少ないと思う」と回答した。

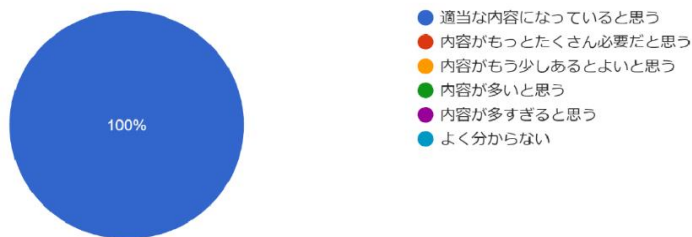
「3-2 4科目の内容は適当だったか」と「3-3 4科目の内容は役に立ったか」に対しては、5名全員が「適当な内容になっていると思う」，「とても役に立ったと思う」と回答した。



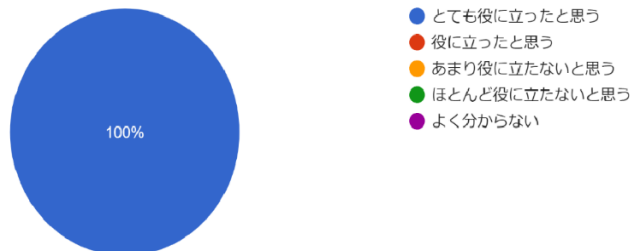
3-1 科目数（特論1, 2, 3+実習）は適当だったか  
5件の回答



3-2 4科目（特論1, 2, 3+実習）の内容は適当だったか  
5件の回答



3-3 4科目（特論1, 2, 3+実習）の内容は役に立ったか  
5件の回答



問3には、自由記述の質問を2つ設けた。

「3-4 4科目（特論1, 特論2, 特論3, 実習1）の内容の中で、とくに役に立ったと思う内容があれば、書いてください（自由記述）」に対しては、以下の回答があった。

- ・ 模擬授業
- ・ 実習
- ・ 特論1, 3 教授法に関する内容
- ・ 特論より実習のほうがいろいろ勉強になった
- ・ 教壇実習

「3-4 4科目（特論1，特論2，特論3，実習1）の内容の中で，あまり役に立たないと思う内容があれば，書いてください（自由記述）」に対しては，以下の回答があった。

- ・特にありません
- ・特にないです。
- ・なし
- ・ないです
- ・とくにありません。

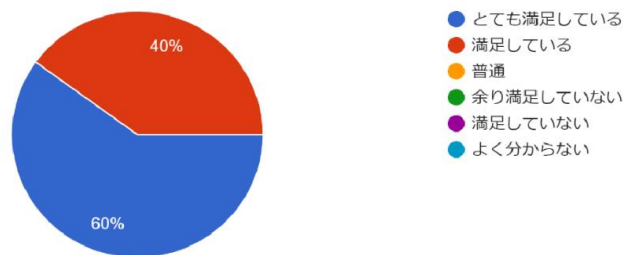
#### 【4 コース全体について】

「4-1 内容に満足しているか」に対しては，5名全員が「とても満足している」または「満足している」と回答した。

「4-2 最初に考えていたものと違うところがあったか」に対しては，5名全員が「イメージ通りだった」と回答した。

「4-3 他の学生にも勧めたいと思うか」に対しては，5名全員が「とても勧めたいと思う」「勧めたいと思う」と回答した。

4-1 内容に満足しているか。  
5件の回答

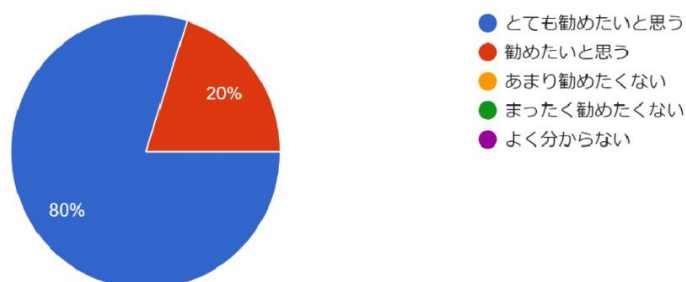


4-2 最初に考えていたものと違うところがあったか  
5件の回答



#### 4-3 他の学生にも勧めたいと思うか

5件の回答



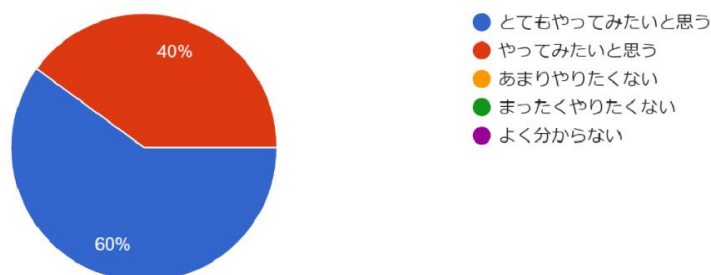
### 【5 日本語教師について】

「5-1 今後やってみたいと思うか」に対しては、5名全員が「とてもやってみたいと思う」または「やってみたいと思う」と回答した。

「5-2 仕事をする可能性があるか」に対しては、「よくわからない」が1名いたが、残り4名は「とても可能性が高い」「可能性が高い」と回答した。

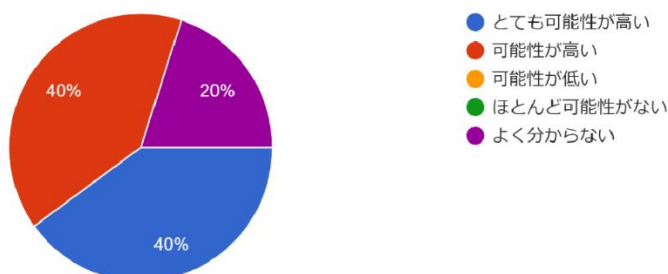
#### 5-1 今後やってみたいと思うか。

5件の回答



#### 5-2 仕事をする可能性があるか。

5件の回答



## 【6 その他、コースについて考えたことがあれば、自由に書いてください（自由記述）】

この問いに対しては、以下の回答があった。

- ・現場を見たい
- ・日本語教育能力試験に関する内容もあった方がいいと思う。
- ・2年間、コロナの中でどのような授業になるかも、日本語教師についても何もわからず何かと不安の多い私でしたが、この授業では知識を広げ、新たなことに取り組むのが大変ながらもとても楽しく充実した時間を過ごすことが出来ました。また、クラスメートと出会い、世間と疎遠になる中でも仲間と協力する楽しさもこの授業で私は思い出せました。素晴らしい先生方の下で一期生になれたこと、本当に幸運だったと思います。二年間お世話になりました。ありがとうございました。

## 7. 総括と課題

### 7.1 総括

令和2年度に開設された日本語教育コースは、令和3年度に基幹科目である必修科目（日本語教育学特論1、日本語教育学特論2、日本語教育学特論3）と選択必修科目（日本語教育実習1（国内））がすべて開講され、基礎コースの修了者を5名出すことができた。令和3年度入学の大学院生についても、5名が基礎コースを履修している。本事業の対象である応用コースについては、令和3年度末現在コース履修中の大学院生1名が令和4年度にコースを修了する見込みである。以上のことから、本事業を通じて、日本語教育コースの基盤は確立されたと言える。COVID-19の影響を克服してコースの基盤を確立したことは、評価委員会でも高く評価された。

コース修了者に対するアンケートでは、カリキュラムや授業内容等について肯定的な評価を得ることができた。また、アンケートの回答からは、学生が日本語教育を修了後の仕事として考えていることもわかった。専攻の枠をこえて学生の日本語教育に対する関心を喚起したことも、本コースの重要な成果の一つである。評価委員会においても、多様な背景を有する多様な領域の学生が学科・専攻の枠をこえて日本語教育について学ぶことは、日本語教育に新たな広がりをもたらすものと評価された。

令和2年度と3年度は、COVID-19の影響により、ほぼすべての授業がオンラインによる同時双方向型授業の形で実施された。「日本語教育実習1（国内）」も基本的には対面授業であったが、一部はハイフレックス方式により実施された。この2年間の経験をふまえ、海外の評価委員からは、海外で日本語を学ぶ学生のための、オンラインを利用した日本語教育やハイフレックス形式による教育実習の可能性が示唆された。

### 7.2 課題

解決すべき課題としては、①当初予定していた「日本語教育実習2（海外）」がCOVID-19の影響により、いまだ実施できていないこと、②応用コースの履修者が少ないことの2点があげられる。

①については、すでに1校（台湾・東呉大学）と「日本語教育実習2（海外）」を実施

するための協定等を取り交わしている。「日本語教育実習 2 (海外)」がいつ実施できるか明確な見通しは立っていないが、実施に向けた準備は着実に進めている。また、令和 4 年度中にはもう 1 校 (中国・清華大学) と協定等を取り交わす予定である。

②については、令和 4 年度に大学院に入学する大学院生の数名が応用コースを履修することが見込まれている。日本大学大学院文学研究科で日本語教育について学べることがさらに周知されれば、応用コースの履修者も増えると予想される。

コースを修了した学生の動向調査も今後の課題である。

以 上